
敷居

たかぴょん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敷居

【Nコード】

N4646G

【作者名】

たかぴょん

【あらすじ】

格式に捕らわれた人生の修行場。余生は修羅場と化す。

「敷居」という単語の響きに心を舞わされない人間はいないだろう。この国に偏散する物は限り無く重厚な隔たりであつた。

「七福神」の日本舞踊が稽古場の板の間をかすかに揺すぶっていた。三味線のしんらつな響きよりも生真面目に唄う長唄の聲が、かえつてわたし自身が日本人の血を継ぐ者だということを自覚させる。

日常事務を司る空間と廊下。それから稽古場をまたいだ狭間に仕切りを作る。白く厚い木戸が浮き世を隔てていた。世界は間違はなく古今とを結ぶ遠近法の距離で区切られている。幕末時代の娘芸者が昨今の埋め立て地である品川・汐留の勤め人と逢い引きをするようなものだ。

聖子の顔が映つた一面鏡は、ラプソディーを奏でている。聖子の頬に双子ニキビを潰した凹跡がくつきりとストーリーテリングをしていた。女にとってはとても悲しい風情。直径一センチメートルの月のクレーターは渴き切っていた。

二十五回目の汗が粘り付く連日の熱帯夜に、聖子はある週刊誌を目にした。その「オプティミスト」という特効化粧品は、文字通り眉唾物だつた。カラーページにゴジック体で書かれ、ひとときわ頼もしく映る。

廊下に置かれた黒電話を回すときもそうだつた。年寄り夫婦の下で育つた聖子は、なんでもずけずけと人に聴くことを物怖じしない。

よく姉子肌の小夜子と些細なことで、押し問答を繰り返した。

「ほんとうにこのニキビ跡は治るんですか」

「個人差はございますが、それなりの評判は頂いております」

聖子は化粧品会社オペレーターの誠実な対応から、わらもすがる思いで、購入を決断した。

器量も古典芸能で生きて行こうとする聖子に必要なものだった。右頬の中央に意地悪な顔を見せるニキビ跡の窪みが、器量を半減させている。小夜子姉さんも、管理人の松倉さんも、満面の笑顔で聖子と話をするが、腹の底では気の毒な女だと思っているのに違いない。一刻も早くあの化粧品が欲しい。明日の朝に顔を合わせるときも、わたしだけ世界が変わったような斬新な笑顔を返したい。そのことを頭の隅で想像するだけでも、感無量であった。実際このような感覚は同じ立場に置かれた人間にしか分からないだろう。

明くる朝、松倉さんは庭木に水を遣っていた。夏の終わりだということもあり、まき散らされた水はざつくばらんにその輝きを淡くさせていた。

「そりやそうだわ」聖子はとても澄ましたような独り言をつぶやいた。まだ昨日塗り始めたばかりなのに、すぐに肌が回復するはずが無い。初心者が踊る「七福神」（七人の神様の物真似をして踊る楽しげな踊り）を踊ったあと、とても肌地が湿っていたのを感じた。体は火照っている。この感覚はこの上もない喜びだ。現代人だと大手を振って都会を歩く同年代には分からない感激である。古代の命と会話を交わした。踊りを通して生き、敷居の向こうで死んで行く敷居を踏むなというのも、自分が生きる信念を白黒させるといことだろう。踊り終わったわたしの方を見て、いつもは口うるさい小夜子さんが微笑んでいた。何をそんなに悩ましげに抱えているのかとも言いたいのか。

「大黒屋の上で毘沙門天が目覚まし」

目をつぶって息をして、さあ起き上がる。

「目覚めにキセルを取り出し、やって来る大黒」

さあ将棋を指す真似だ。毘沙門天に化けよう。センスを要返し（裏返し）して、後頭部に付ければ兜の格好と。

親指隔てた白足袋の隔たり。ほのかに漂うわたしの体臭。さあ三年受け継いだ舞いは終わった。

三味線の音が止まった。

休み明けに小夜子の札が無くなっていた。四十歳の誕生日を前にして辞めたのだろう。肌が合わない姉子が辞めたのは、たしかに清々しかった。「ざまあ見る」という言葉さえ頭をよぎった。

ほとんどの先輩は喰えないから辞めて行く。日本舞踊の世界で生活出来る人間は少ない。二十歳の若さで入門し、アルバイトを続けながら恋も捨て、芸に若さを捧げる。彼らの騙された二十年は徒労に終わった。当の本人は、やっと肩の荷が降りたという歓喜の方が強いかも知れない。やがて中堅どころも辞めて行くだろう。松倉さんも以前はこの道を目指し、創立以来のホープだと期待されていた。だが良い女房が出来たということで、一線から身を引いた。

今の日本は、夢を追える自由な時代だ。四十歳になつて独り者でアルバイトを続けていても、周りは口を挟まない。何を選んでも自由。夢を追うのも自己責任。ただ小夜子のように泣き叫び罵倒しながら、敷居を踏んで出て行くことだけはしないでもらいたい。

さあ七福神の三味線が鳴り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4646g/>

敷居

2010年12月25日01時58分発行